

資料館だより

第 72 号
2013.9.30

特別展予告

港区立港郷土資料館所蔵 幕末・明治期古写真展 ～ 名所・旧跡、そして人々～



東禅寺 江戸湾遠望 ミヒャエル・モーザー撮影 明治5年(1872)頃
(本館蔵、『幕末・明治期古写真集』No. 66)

古い写真には、時を経てすっかり変わってしまった景観や、災害・戦災で失われた文化財、撮影当時の風俗や生活の様子などの記録という歴史資料としての側面があります。当館では、資料収集の一環として、古写真の収集を進めており、平成24年度末、これらの中から、幕末から明治時代に撮影されたと考えられる古写真169点を収めた写真集『港区立港郷土資料館所蔵幕末・明治期古写真集～名所・旧跡、そして人々～』を刊行しました。

ところで、「古写真」という語は、実はとてもあいまいな表現です。写真自体が、その誕生からまだ175年ほどしか経っていない比較的新しいものでもあり(1839年に「ダゲレオタイプ」と呼ばれる写真技術が、フランス国有の発明として発表されました。一般にこれを「写真の誕生」としています)、

どこまでを古写真というのかを含め、明確な定義がされていません。そのため、写真史や研究の立場では、幕末・明治初期までの写真を「初期写真」「歴史写真」と呼ぶことが主流になっています。当館では、「歴史の流れの中の一瞬を画像として記録した歴史資料」として位置づけていますので「歴史写真」という呼称と合致しますが、馴染みのある「古写真」という呼び方を採用しました。

平成25年度の特別展では、前述の写真集に掲載した古写真の原資料やパネルに加え、特別展示として「井関盛良コレクション」「文久遣欧使節団」の人物写真を公開します。

会 期：平成25年10月25日(金)

～12月15日(日)

会 場：港区立港郷土資料館

特別展「幕末・明治期古写真展」に寄せて

松本 健

(元 港区立港郷土資料館学芸員)

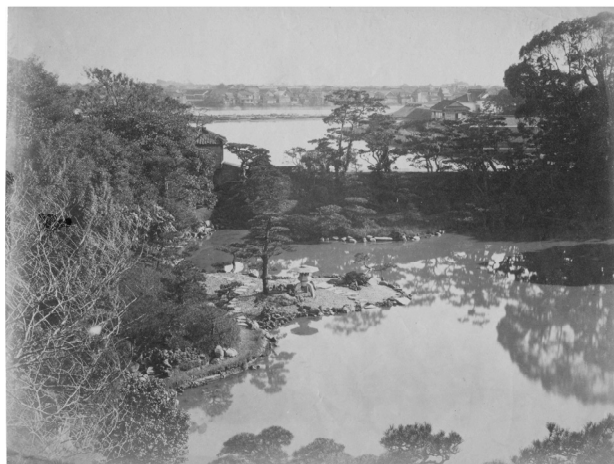
日本人のカメラ好きは世界的に有名で、以前は日本人旅行者の風刺画には必ずカメラを肩から下げる姿が描かれるほどでした。近年、コンパクトサイズのデジタルカメラやカメラ付携帯電話の普及とともに、カメラの機能性も高まり、国民の大多数がカメラを持つといっても過言ではない時代となりました。フィルムの残り枚数を気にすることなく、気軽にシャッターを押して、数多くの写真が残されるようになったのです。そうした写真の多くは、いわゆる「記念写真」ですが、偶然目撃した事故や事件といった緊急性の高い状況が被写体となることもあります。こうした写真は、事件や事故を解決するための証拠資料といえます。また記念写真も、時が経つにつれて次第に薄れていく記憶を呼び戻すための格好の証拠資料といえます。写真は、どのような目的で撮影されても、写された瞬間から「記録」という性格を持つ資料なのです。

アマチュア写真家が数多く誕生したのは、35mmサイズのカメラが普及し始めた昭和初期といわれます。それまでは、経費的にも決して安価ではなかった写真は、主にプロ写真家によって撮影されていました。幕末・明治期においては、撮影にかかる手間と経費は現在よりはるかに高いものでした。そのため写真は、基本的には写真家が依頼を受けて、記録を目的に撮影したものといわれます。しかし当時は依頼を受けて撮影した写真も、写真家が自由に販売できたため、販売を前提に演出を入れて撮影されることも数多くありました。館蔵の古写真も、こうした写真なのです。

写真は、歴史の流れの中のある一瞬を画像として残した資料です。ただし、資料として位置づけるためには、最低限、写された場所と時が明らかであることが必要です。最近のデジタル

カメラには、撮影年月日が秒単位で記録されるとともに、GPS機能の搭載により撮影地点の緯度・経度まで記録されるようになっています。しかし、古写真自体にはそうした記録は何も残されていません。中には、撮影場所を示すタイトルが付けられているものもありますが、誤りのあるものもあります。下の写真は当初「浜離宮」というタイトルが付けられていましたが、風景を古地図に当てはめて検討した結果、隅田川に架かる清洲橋のやや下流沿いにあった大名屋敷の庭園であることがわかりました。

東京は震災や空襲によって多くの貴重な建物等を失いました。また、東京オリンピックを契機として急速に進んだ都市開発によって、古い町並みはその姿を消しました。古写真にはそれらを知るための多くの情報が残されています。そこから何が読み取れるかは、読む側の経験や知識による部分が大きいといえます。今回の特別展で展示される古写真をご覧いただき、皆さんも地域の歴史や文化の復元のために新たな発見をしてみませんか。



庭園

撮影者不詳、19世紀後半、200×265 (mm)、鶏卵紙

(本館蔵、『幕末・明治期古写真集』No. 86)

芝切通（切通坂）

平田 秀勝

（文化財保護調査員）

「切通^{きりどおし}」とは、その名のとおりに山や丘などを切り開いて通した道のことを言います。切通というと、鎌倉幕府滅亡の舞台にもなった鎌倉の極楽寺坂切通・仮粧坂切通^{けわいざか}などが有名ですが、鎌倉のみならず、全国各地に見ることができる地名です。港区内にもかつて「切通」と称された場所が数ヶ所あり、その中でも特に「芝切通（切通坂）」は、江戸っ子たちに広く知られる名所の一つでした。

芝切通は、現在の虎ノ門三丁目と芝公園三丁目の間をオランダ大使館、区立芝給水所公園に向かって上っていく坂道です。江戸時代には、江戸有数の盛り場として知られ、『新撰東京名所図会』には、

●切通坂

愛宕下より飯倉に通ずる一條の道路、青松寺と増上寺の間の坂を切通と称す。府内備考〔御府内備考〕に云、切通坂^{いう}は、増上寺と青松寺との間の坂なり、上り凡七十六間余〔約136.8m〕、青松寺東南角、桜川石橋より増上寺涅槃門際迄、長^{なが}凡百三十間余〔約234m〕、坂口横幅四間一尺程〔約7.5m〕、中程横幅十四間程〔約25.2m〕皆切通の内なり、その開かれし年月を詳^{つまびらか}にせず。狂歌江都名所図会に云、寛永年中〔1624～1644〕、縁山〔三縁山増上寺〕西の方の山を切り広げ、往来となり、時の鐘あり、下には見せ物、浄瑠璃〔浄瑠璃〕、菰張芝居、豆蔵〔大道芸人の一種〕、居酒見世、団子茶や、大道小道具商人、古着見世等あり。〔後略〕

と記されています。芝切通は、坂道ではあるものの道幅も広く、愛宕下から現在の飯倉交差点、桜田通り方面へ通じるメインストリートであり、

路上には、見世物や大道芸人、芝居小屋が出て、居酒屋、茶店、道具屋、古着屋などが立ちならぶ賑やかな場所であったことがうかがえます。その様子は、江戸時代から昭和に至るまで江戸・東京を代表する繁華街であった浅草奥山とならび評されるほどでした。

また、芝切通の坂口西側、青龍寺と青松寺に隣りあう丘の上には、鐘の音で江戸の町に時刻を伝える「時の鐘」が置かれていました。これは、元和5年（1619）、西久保八幡神社境内に設置されたものが、寛文10年（1670）に破損したため、延宝2年（1674）より芝切通に移転して再開したと伝えられます。時の鐘は、日本橋本石町三丁目・浅草寺・上野寛永寺・本所横川町・市ヶ谷八幡・目白不動・赤坂円通寺（後に成満寺へ移転）・四谷天龍寺など、江戸市中の各所にありましたが、この場所の時の鐘は、俗に「芝切通の鐘」と呼ばれ親しまれました。

明治維新後、芝切通の盛り場、時の鐘はともに廃止されました。愛宕下から桜田通り方面へのメインストリートの座も明治末期に開かれた坂下の平坦な道に譲り、現在では学校や大使館、公園に囲まれる静かな坂道に姿を変えています。時代を経て景観は大きく変わりましたが、道筋はそのまま残っており、当時の面影を偲ぶとともに、江戸と東京の繋がりを思い起こさせます。



現在の芝切通（切通坂）

江戸の動物

— コウノトリ —

山根 洋子
(文化財保護調査員)

コウノトリは昭和 31 年 (1956)、特別天然記念物に指定された貴重な鳥です。しかし、昭和 46 年 (1971)、兵庫県豊岡市で死亡した個体を最後に国内での生息は確認されず、稀に大陸から渡来するものが見られるだけとなりました。

コウノトリについては、ヨーロッパの伝承に基づく「赤ちゃんを運んでくる鳥」というイメージを持たれる方が多いかもしれませんが (註 1)、実際にどんな鳥なのかご存知でしょうか。白い羽で覆われたその姿はツルにも似て美しく、風切羽やくちばしの黒色、脚と目の周りの赤色がアクセントになっています。全長は約 110 cm、両翼を広げると約 200 cm にもなる大型の鳥です。

大木の樹上や屋根の上に大きな巣を作る習性を持つコウノトリは、江戸時代の江戸の町でも姿やその巣を散見できたことが記録に残されています。肥前平戸藩主松浦清 (静山) の随筆『甲子夜話^{かつ}』(1821~1841年)では、浅草御蔵前西福寺や本所五百羅漢寺の瓦上にコウノトリが営巣したことが記され、港区域の青山新長谷寺 (西麻布に所在する長谷寺を指すと思われます) の屋上かけられた巣についても触れています。また、江戸やその近郊の名所を記した地誌『江戸名所図会』(1834・36年刊)を見ると、長谷川雪旦が描いた緻密な絵の中に本所弥勒寺本堂や本所五百羅漢寺本殿の屋根に留まるコウノトリと思しき大きな鳥や巣が確認できます。さらには、トロイの発掘で有名なドイツ人、ハインリッヒ・シュリーマンが1865年に日本を訪れた際の紀行文にも、浅草観音寺の屋根にコウノトリの大きな巣があり、親鳥とたくさんの雛鳥がいたこと、深川八幡宮の枯木の梢にコウノトリの巣が見えたことが書かれています (註2)。このように江戸の町では、コウノトリはさほど珍しくはなく、明治時代初頭頃までは東京でも普通

に見られる鳥でした。

江戸の遺跡からはツル類やハクチョウ類、ワシ・タカ類などの大型鳥類の骨が出土することがありますが、これら大型鳥類のどの種とも形態が一致しない大きな四肢骨が汐留遺跡や愛宕下の遺跡などの武家屋敷跡から出土しています。形態的にはサギ類に似るこの骨を詳しく調べたところ、コウノトリであることがわかりました。考古学的にもコウノトリが江戸の町にいたことが証明されたのです。ただし、コウノトリの出土は決して多くはないことから、人々が食用や他の用途で積極的に利用した鳥ではないことが窺えます。

古くから「松」と「鶴」はめでたいものとされ、「松上の鶴」は日本画の画題にもよく取り上げられるものです。しかし、実際、ツルが樹上で生活することはないため、松上に描かれた鳥はコウノトリであろうと考えられています。江戸の人々がコウノトリとツルをはっきりと区別していたかどうかわかりませんが、コウノトリもツルと同様に縁起の良い鳥と捉えられ、寺などの屋根に作られた巣も取り払うことなく大事にされていたのではないのでしょうか。

豊岡市では平成元年 (1989) にコウノトリの飼育下繁殖に成功し、再野生化に向けて平成 17 年 (2005) から放鳥も開始されました。今後、野生のコウノトリが優雅に空を舞い、樹上や屋根の上の大きな巣で子育てをする様子が普通に見られるようになり、かつての東京 — 豊かな自然が残る江戸の町 — に思いを馳せることのできる日が来るかも知れません。

(註 1) ヨーロッパのコウノトリは、日本のコウノトリと近種ではありますが、「シュバシコウ」という別種です。

(註 2) H.シュリーマン/石井和子訳 1998 年『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社学術文庫

芝田町八丁目にあった柳沢伯爵邸

川上 悠介

(学芸員)

港区三田三丁目 11 番地（旧住所：芝田町八丁目）、国道第一京浜と JR 線路に挟まれる土地に、かつて柳沢吉保（幕府御用人）の子孫である柳沢伯爵家がその居を構えていました。明治 6 年（1873）に柳沢家 7 代目当主の保申（やすのぶ）が移り住み、8 代目の保恵（やすとし）が洋館を建て、9 代目の保承（やすつぐ）が戦後間もなくにこの地を離れるまでのおよそ 70 年間のことです。この邸宅に関する資料として、明治期から昭和戦前期まで柳沢邸の建築に携わっていた清水組の図面類が現・清水建設に保存されています。これらの資料から、芝田町にあった柳沢邸の変遷を読み取ることができます。

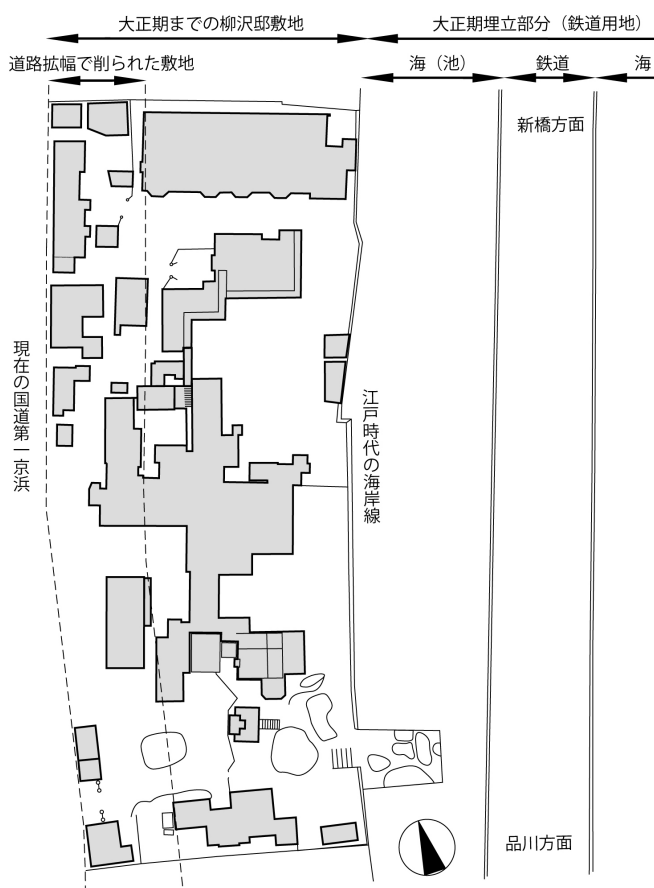
柳沢家が移り住んだ明治 6 年、敷地東側は、東京湾の海岸線で、眼前に海が広がり、海上を新橋・横浜間をつなぐ汽車が走っていました。この光景は、当時の錦絵の題材としても取り扱われており、柳沢邸からも眺めることができたであろうと考えられます。

明治の終わりになると、港の整備を進めるため、芝沿岸の埋立てが開始されます。その埋立てでも大正 7 年（1918）頃には完了、埋立地には工場などが建ち並び、柳沢邸から海を眺めることはできなくなりました。

昭和に入ると、柳沢邸の周辺環境は益々変化します。大正 12 年に起きた関東大震災をきっかけに、東京の道路整備が加速し、その一環として、柳沢邸の目の前、現・国道第一京浜の拡幅が昭和の初めに進められました。柳沢邸は、敷地の 1/3 近くを道路用地として提供し、併せて建物の一部を解体します。もっとも、車寄せ部分のみは大和郡山の別邸に移築され、現在では同所にある柳沢文庫の入口車寄せとして、芝田町邸のよすがを伝えています。

さらに時代は進み、太平洋戦争の末期になると、柳沢邸周辺は強制（建物）疎開の対象地とな

ります。『新修港区史』付図などによれば、柳沢邸付近は、疎開対象地には該当していないようにも見えますが、実際は洋館等を解体し、戦後は解体部材が敷地内に存置されていたという話も残されています。残念ながら、解体部材の行方は定かではありません。そして戦後間もなく、柳沢家は田町の敷地を手放します。



柳沢邸の変遷図面／拙稿「芝田町八丁目・柳沢保恵伯爵邸の変遷」『明治・大正の邸宅 清水組作成彩色図の世界』（柏書房、平成 21 年）を改変

芝田町の柳沢邸とそこから眺めることのできる風景は、鉄道や港湾施設の整備、道路の拡幅といった、日本の近代化の諸相と共に変容した、端的な事例の一つといえるでしょう。

後世に伝える戦争の記憶

～永昌寺の「忠魂供養塔」～

杉本 絵美
(文化財保護調査員)

近現代の戦没者に関わるモニュメントには碑や塔、人形の像など様々な形態があります。これらモニュメントは戦没者に対する追悼・顕彰などのために造られたもので、港区にも永昌寺や青松寺などに戦没者関連モニュメントがあります。今回は六本木に所在する永昌寺に建つ、日中戦争で亡くなった兵士を供養するための石碑を紹介します。

戦没者関連モニュメントの建立は幕末維新期の招魂碑に始まると言われていますが、日清・日露戦争をきっかけに、各戦役ごとに戦没者を集団で追悼するモニュメントを、個人墓とは別に建設することが一般化しました。

日中戦争においても、多数の戦没者を追悼するため、遺族や帰還した兵士によってモニュメントが各地で建てられるようになります。永昌寺の碑もこのような動きの中で建てられた碑の一つといえるでしょう。

高さ2mを超える永昌寺の石碑には「忠魂供養塔」と刻まれ、裏面には鋳造された銘板がはめ込まれています。銘板には、「加納、飯塚、布施部隊、山本隊」とあり、次に亡くなった51名の兵士の名が綴られ、最後に「昭和十五年七月七日 戦友一同 建之 昭和三十九年七月七日 再建」と記されています。碑の脇には由来を説明した副碑も設置されています。「加納、飯塚、布施部隊」とは日中戦争に動員された歩兵第百一連隊のことで、3人の歴代連隊長の名前を冠した名称で表現されています。この碑はその連隊の下で山本隊として編成された兵士達の戦死・病没者を供養するために建てられたものなのです。(副碑には「52人の英霊」とあるが、銘板には51名分の名前しか記されていない。)

歩兵第百一連隊は、盧溝橋事件を契機とした日中戦争開始後の昭和12年(1937)9月に編成

され、上海戦線に派遣された第百一師団に所属した部隊でした。第百一師団は上海戦の後、南京攻略ではその援護に回り、南京陥落後は徐州、武漢、南昌と中国各地を転戦、昭和14年11月に復員命令が出され東京に帰還します。

連隊は上海戦において初代連隊長の加納大佐が戦死、その後も二代連隊長の飯塚大佐が戦死するなどの苦戦を強いられ、多数の死者を出しました。そのため、戦地から帰還した兵士達は亡くなった仲間を供養するために碑を建てることとします。建立の地として永昌寺を選んだ理由については、召集をうけた兵士達が永昌寺に集まり出征していったことから、彼らにとっての出発地である場所に建てることにしたと言われています。

現在の石碑は昭和39年に再建された碑で、建設当初の碑の姿を知ることはできません。しかし、今も形ある姿で残されていることで、戦争の記憶を伝え続ける役割を果たしています。



忠魂供養塔
(永昌寺)

参考文献

『日本陸軍歩兵連隊』1991年 新人物往来社
大原康男『忠魂碑の研究』1984年 暁書房

ぶ け もんじょ 館蔵 武家文書

竹村 到
(文化財保護調査員)

江戸時代、現在の港区域には多くの武家屋敷が存在し、将軍直属の家臣である旗本・御家人をはじめ、各大名家の江戸屋敷に詰めていた藩士などが生活をしていました。

それらの武士が残した文書には、縁組・養子・^{はいちやく}廃嫡など家の存続や、自身の江戸での生活や職務に関する内容などが記されています。

当館では、そのような武家文書を紹介するため、平成25年3月22日（金）から6月15日（土）までの期間、前期を「旗本・御家人の文書」、後期を「大名家・藩士の文書」とそれぞれ題して、コーナー展「館蔵武家文書」を開催しました。

前期では、久保家文書（旗本）・大谷木家文書（旗本）・増山家文書（御家人）を中心に紹介し、家の相続や役務に関する文書を展示しました。武家にとって、家を存続させて後世に残すことは最重要の課題でした。そのため、相続や縁組には特に注意が払われていました。

後期では、乃木文庫（長府藩士）・井関家文書（宇和島藩士）・^{しかの}横山家文書（鹿野藩士）を中心に紹介し、大名家が負担する課役や大名家に仕える武士の職務について考えました。

では、改めて展示した文書をいくつか紹介しましょう。久保家文書「^{ひのえとらどし}慶応二内寅年五月八日判元一件帳」は、久保家が幕府へ跡目相続を願った際の記録です。

「判元」とは「^{はんもとみとどけ}判元見届」のことで、幕府の役人が当主の病状や跡継ぎの様子、および家族・親類の構成などを確認することです。この手続きは、^{まつご}末期養子などの当主死去後に跡目相続の願書を提出する際によく用いられました。これは、次期当主の届け出を事前に済ませておく必要があったためです。この現場には、医師と親類も立会いました。

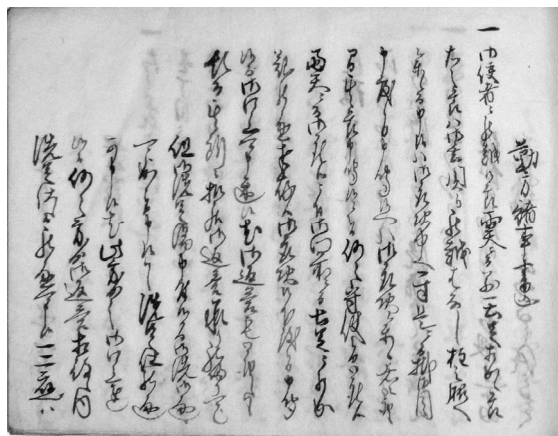
展示した文書では、当主が生存しているよう

に記されていますが、実際にはすでに死去していたと考えられます。幕府も、家を存続させるため、上記の手続きを採らせるとことで家の相続を認めることが多々ありました。

大名家の課役に関する文書では、防火に関する資料をいくつか展示しました。たとえば、乃木文庫「三町火消心得書写」は、長府藩の江戸屋敷に賦課された「三町火消」に関する史料です。「三町火消」とは、自身の江戸屋敷の周囲三町（327.27m）で火災が発生した場合の消火活動を命じたものです。

また、藩士の職務記録として、八戸藩村上家文書「江戸勤方御番士諸心得書」を展示しました。これは、過去に江戸勤めをした人びとがまとめた「マニュアル」を書写したものです。これに加え、後半には自身が江戸で担当した職務に関するさまざまなことが書き留められています。藩士たちは、江戸での勤務にそなえて入念な準備をおこない、江戸では後世役立ちそうな各種情報の蓄積をしていました。

これらは展示した史料のごく一部ですが、この紹介を通じて展示の雰囲気を感じていただければ幸いです。



八戸藩村上家文書「江戸勤方御番士諸心得書」

事業予定 (平成25年10月～)

特別展 港区立港郷土資料館所蔵 幕末・明治期古写真展 ～名所・旧跡、そして人々～

会 期：10月25日(金)～12月15日(日)

会 場：港郷土資料館 《入館無料》

開館時間：9:00～17:00

(会期中の金曜日は19:45まで延長開館)

休 館 日：11月21日(木)、毎週月曜日

(ただし11月4日は開館し、11月5日(火)休館)

◆ 展 示 解 説 (事前申込み不要) ◆

11月23日(土・祝日) 14:00～15:00

★特別展関連資料館講座を実施します。

日時：① 11月2日(土) 14:00～16:00

② 11月8日(金) 18:00～19:30

③ 11月22日(金) 18:00～19:30

会 場：三田図書館3階 集会室 (①はその後展示見学)

定 員：40名 ※要事前申込み

申込みの詳細は『広報みなと』10/11号に掲載予定です。

コーナー展

・「新収蔵資料展」 開催中～10月12日(土)

・「慶應義塾大学所蔵資料展(仮)」平成26年1月6日(月)～2月19日(水)

・「指定文化財展(仮)」平成26年2月21日(金)～3月19日(水)

講座など

・土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう！」12月14日・平成26年2月22日

・資料館講座(全3回、金曜日) 平成26年2月(予定)

・親子学習会(全2回、土曜日) 平成26年3月8日・22日(予定)

・各事業の詳細は、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧ください。

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室でおこなっています。

事業報告 (平成25年3月～平成25年9月)

①親子学習会『日本庭園にふれてミニミニ石庭(枯山水)を作ってみよう!』 3月9日、23日

7月5日、12日、19日、26日、8月2日

②コーナー展「館蔵武家文書」 3月22日～6月15日

⑤夏休み体験ミュージアム

「チャレンジ! 縄文土器を作ろう」7月23日・8月19日

③土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう!」

⑥港郷土資料館・東京海洋大学附属水産資料館連携事業

5月25日、7月6日、8月31日

夏休み学習会 ～東京湾 自然と人～

④古文書講座「古文書を読もう!—初級・中級—」

「東京湾の自然と暮らし」

8月20日・21日

港区立港郷土資料館の利用案内

交 通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00 《入館無料》

休 館 日 日曜日・祝日・第3木曜日

年末年始・特別整理期間

(特別展中の休館日は本頁上段をご覧ください)

※特別展前後の休館日※

10月13日(日)～10月24日(木)

12月16日(月)～平成26年1月5日(日)



『資料館だより』第72号

平成25年(2013)9月30日発行

編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 25105-7541